

ARDEC「農業農村開発の技術を考える」(溝口勝 教授) より 要点

本稿では冒頭で農業農村開発の技術を研究する学問としての農業農村工学と区別し、その実学としての側面を強調している。その上でその本質、導入のために不可欠な現地文化と人々の本音の理解について、筆者の農業技術に関わる幼少期からの経験を概観しながらヒントを示す試みがなされている。

筆者は農家の子息として、技術が普及する以前の「何でも屋さん」としての農家が農業機械の導入、農協の台頭によって専業家に変遷していく様子を、そしてその後の生産調整による行き詰りを、身を持って体験してきた。大学で農業土木学を学び、海外調査の舞台として初めて東南アジアの途上国を訪れた筆者は、自分が幼少期を過ごした、機械が導入される以前の日本の農村に似た雰囲気を感じたという。そして日本においてそうであったように現地の農家たちは本音と建て前を使いこなしていたため、外部の技術者に対する反応が本音かどうか容易には判断できない。

同時に日本の農業機械導入の帰結の一例を知る筆者は、現地に技術を導入した未来を想像して畏れを感じた。日本での技術導入の負の側面として、初期には公害問題や過剰生産に伴う減反を経験し、十分普及した現代では後継者不足や耕作放棄地が問題になっている。導入によって現地社会がどのように変化するのか、それが農家たちにとって本当に良いことなのか、という検討は常に意識する必要がある。

換言すると、国際協力の場合で日本の経験を途上国の農業農村開発で活かしていくためには、過去の結果や現状を正しく分析する一方で、その地域の現状や既存の技術、そして人について分析し、導入する技術とその順序の決定を行わなければならない。特に技術という知的財産の定着を左右するかどうかはそこに暮らす人々次第である。導入できる技術が加速度的に進歩している近年、期待できる成果の煌びやかさに現地の人々のニーズが隠蔽されていないか、そしてその技術が彼らに扱えるようなモノなのかはさらなる注意が必要な論点となっている。